

運命と意識——ヴラジーミル・ナボコフの
『ユリシーズ』論Fate and Consciousness: Vladimir Nabokov's Reading
of *Ulysses*

鈴木 聡

SUZUKI Akira

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

1. 混合と個別化
2. 放浪という主題
3. 異邦人とその運命
4. 注意と共感

キーワード：ヴラジーミル・ナボコフ、ジェイムズ・ジョイス、『ユリシーズ』、文体の多様性

Key Words : Vladimir Nabokov, James Joyce, *Ulysses*, multiple styles

【要旨】

ヴラジーミル・ナボコフの『文学講義』（フレッドソン・パワーズ編、1980年）で取り扱われた諸作品のうち、二十世紀を代表するものとして選ばれたのは、マルセル・プルーストの長篇小説『スワン家のほうへ』（『失われた時を求めて』第一篇、1913年）、フランツ・カフカの中篇小説『変身』（1912年執筆、1915年発表）、ならびにジェイムズ・ジョイスの長篇小説『ユリシーズ』（1922年）である。普遍と特殊を絶妙な均衡のうちに併存させた稀有なテキストである『ユリシーズ』にかんして、ナボコフは、その細部の緻密な組み立てとともに、ブルームという比類ない中心的登場人物の造型に主眼をおいて論じるいっぽう、それがホメロスの原典とのあいだに有している主題論的類縁関係にかんしては極力無視しようとする。「再帰する主題群と瑣末な事象の同時生起という周到なパターン」が『ユリシーズ』の全体をかたちづくっていることをナボコフは認めている。また、ブルームとステイーヴンのあいだになんらかの共感が生じ得る可能性も否定できない。にもかかわらず、ブルームという



単一の主人公のさまざまな対象にたいする気遣いに重点を置くナボコフは、「ブルームと運命」こそが『ユリシーズ』の主題であると喝破する。それは、後年、彼自身の長篇小説『ロリータ』（1955年、1958年）において変奏されることになるものとも考えられるであろう。

We can approach to the basic outline of Vladimir Nabokov's lectures at Cornell University and some insights provided there through reading his *Lectures on Literature* (edited by Fredson Bowers, 1980). Among the works dealt with, the artistic accomplishments of the twentieth century are represented by Marcel Proust's *Swann's Way* (1913) (the first volume of his seven-part novel, *In Search of Lost Time*), Franz Kafka's novella *The Metamorphosis* (1912, 1915), and James Joyce's *Ulysses* (1922). While regarding *Ulysses* as an inimitable text which makes it possible the universal and the specific could coexist in perfect equilibrium, emphasising the importance of reconstructing the precise details by the reader's imagination, and, most importantly, focusing on thoughts and sentiments of the most unique and unprecedented central character, Leopold Bloom. Nabokov urges students to try to ignore the intertextual relationship which too often has been thought to exist between *Ulysses* and Homer's original (*Odyssey*). It is certain that "[t]he whole of *Ulysses*. . . is a deliberate pattern of recurrent themes and synchronaization of trivial events," and it is difficult to deny that there could be the possibility of a certain sympathy growing between Bloom and Stephen Dedalus. Nevertheless, Nabokov, to whom Bloom's tenderness towards others seems to be the central point of the text, believes that the most important theme we should find in *Ulysses* is "Bloom and Fate": the theme which is, in a sense, to be developed by Nabokov himself in his novel, *Lolita* (1955, 1958).

1. 混合と個別化

ヴラジーミル・ナボコフが遺した草稿ならびに覚え書きにもとづいて、フレッドソン・バワーズが編纂した二巻の講義録、『文学講義』（1980年）¹⁾と『ロシア文学講義』（1981年）²⁾から窺い知ることができるように、1950年秋学期以降、コーネル大学で開かれたナボコフの授業³⁾においては、取り扱われる長篇小説（ならびに中篇小説）の全容とともに、それらの特徴的な細部に受講者が（極力主体的に）眼を向けることができるよう、示唆を与えるという方針が採られていたものと察することができる⁴⁾。

授業計画を新たに策定するにあたり、ロシア語作品（ニコラーイ・ゴーゴリ、イヴァーン・トルゲーネフ、フョードル・ドストエーフスキイ、レーフ・トルストイ、アントーン・チェーホフ、マクシム・ゴーリキイ⁵⁾）と、アメリカ合衆国在住以前に親しんでいた「西ヨーロ

「ツッパの虚構作品」(「カフカ、フローベールならびにブルースト」)を含めるところまでは、特に頭を悩ます必要がなかった模様であるものの、講義全体の組み立てのために必要となる「少なくともふたりの」イングランド人作家(「長篇小説あるいは短篇小説の」)の選択に苦慮したナボコフが、エドマンド・ウィルソンに助言を求めた(四月十七日付書簡)⁶⁾ことについてはすでに別のところで触れた。

ウィルソンの説得(四月二十七日付書簡)⁷⁾を受け容れてナボコフが授業内容に加えることとしたジェイン・オースティンの長篇小説『マンスフィールド・パーク』(1814年)とチャールズ・ディケンズの長篇小説『荒涼館』(1852-53年)、ならびに、その後、創作年代順に取りあげられたものと見られるギュスターヴ・フローベールの長篇小説『ボヴァリー夫人——地方風俗』(1856年、1857年)、ロバート・ルイス・スティーヴンソンの中篇小説『ジーキル博士とハイド氏の奇妙な事件』(1885年執筆、1886年出版)、マルセル・ブルーストの長篇小説『スワン家のほうへ』(『失われた時を求めて』第一篇、1913年)、フランツ・カフカの中篇小説『変身』(1912年執筆、1915年発表)にかんする講義をめぐっては、これまで個別に考察を行ない、その過程でいくつかの点を明らかにすることができたものと思う⁸⁾。

ナボコフが思い描く見取り図にしたがうならば、かなり限られた数の代表例によって概要を示し得る十九世紀から二十世紀にかけての虚構作品の歴史にあって、おそらく彼が母国の文学者たちと同等の愛着を感じ、最大級の重要性を認めていたのが「カフカ、フローベール、ブルースト」という三人の文学者であることは強調しておいてよい。それらの文学者の手になる三作品以外に、講義において取りあげられた四作品は、(敢えていうならば)年代順の配列のなかに生じざるを得ない空所を可能な限り埋めるために選択されたものということになるだろう。

それら四作品のうちふたつは、すでに触れたように、ウィルソンの教示⁹⁾を受けてナボコフがはじめて重視することとなったものである。残り二作品のうちひとつは、ウィルソンの賛同が得られなかったにもかかわらず¹⁰⁾、その反対を強引に押し切るようにして、十九世紀文学の一劃を占めるものとして講義に加えられることとなった、ナボコフの年来の愛読書、スティーヴンソンの『ジーキル博士とハイド氏の奇妙な事件』であった。それにたいして、全講義の掉尾となる最後の一作品、ジェイムズ・ジョイスの長篇小説『ユリシーズ』(1922年)¹¹⁾が、ブルースト、カフカとともに二十世紀文学を代表していることにかんしては、ウィルソンならずとも、おおかた異論の余地はないと称してよさそうだ¹²⁾。いずれにしても、ふたりのイングランド人文学者(オースティンとディケンズ)の作品が、ナボコフにとってほぼ未知の領域に属すものであったのは異なり、スコットランド出身の作家(スティーヴンソン)とアイルランド出身の作家(ジョイス)の作品にたいする個人的評価は、早い段階ですでに定まっ

いたのだった。

講義の冒頭でナボコフは、ジェイムズ・ジョイスが1882年、アイルランドで生まれ、二十世紀最初の十年のうちにヨーロッパへ渡り、以後の生涯の大半を「国籍離脱者」として過ごし、1941年、スイスで没したこと、『ユリシーズ』が1914年から1921年にかけて、トリエステ、ツューリヒ、パリで執筆され、1918年から『リトル・レビュー』誌に掲載されはじめたことを簡潔に説明する（Nabokov 1980: 285）。徹底して客観的な記述には違いないにせよ、二十世紀以降のジョイスの生涯がナボコフ本人の前半生と重なっている点を、われわれは見落とすべきではあるまい。『ユリシーズ』が雑誌に分載されたのちに単行本として出版された時期は、ナボコフがケンブリッジ大学トリニティ・コレッジの学生であった期間と一致している。当時、ヴラジミール・シーリンという筆名を用いて文筆家としての経歴を歩みはじめていた彼にとって、『ユリシーズ』が文字どおり同時代の作品であったことは疑いないのだ。

1966年九月二十五日から二十九日にかけて、モントルーで行なわれたインタヴュー（インタヴューアーはアルフレッド・アペル・ジュニア）¹³⁾にさいしてナボコフ自身が回想しているところによれば、「1920年代初頭に横目でちらっと見たあと」、自分と『ユリシーズ』とのあいだに「真の接触」が生じたのは、「1930年代にはいり、文筆家としての自己が明確に形成されて、文学的影響のようなものを受けずに済むようになった頃」であったとされる¹⁴⁾。

われわれがすでに理解しているとおり、その後、1950年代にナボコフは、コーネル大学における講義のためにこの作品の研究に本格的に取り組むこととなる。彼の言によれば、それは、「自分がコーネル大学で受けた教育の最良の部分」にほかならなかった。「『ユリシーズ』は、ジョイスの他の著作に冠絶している」とナボコフは語っている。「その高貴な独創性、ならびに思考と文体の比類ない明晰性」に比較するならば、ジョイスの最後の長篇小説『フィネガンズ・ウェイク』（1939年）は、「贗造された民間伝承の無秩序で鈍重な塊、書物からつくられた冷めたブディング、隣室で絶え間なく続いている軒」にすぎないとされるのである。

ヨーロッパ文学を扱う講義を担当するようになったことをきっかけとしてナボコフは、学生たちのまえで、思い入れ深い作品について語る貴重な機会を得たわけだが、それにともなって、彼は、1950年代という時点までにすでに蓄積されていた『ユリシーズ』研究の主たる成果を多少なりとも把握しておく必要を感じたものと思われる。アメリカの大学で教えることになったという事情、ウィルソンとの交流などが、どの程度まで影響を及ぼしたかは定かでないものの、ウィルソンの初期の代表作『アクセルの城——1870年から1930年に到る想像力文学にかんする研究』（1931年）¹⁵⁾以後の（特にアメリカにおける）研究ならびに批評の動向が意識されていることが、講義の随所から窺われるのだ。

ある箇所ではナボコフは、「ジョイスは宗教を失ったが、みずからの範疇は保ち続けた」とい

う言葉をハリー・レヴィンの著書から引用している (Nabokov 1980: 286)¹⁶⁾。そこで示唆されているものとは、イエズス会が運営する学校 (クロンゴウズ・ウッド・コレッジ、ベルヴェデア・コレッジ、ユニヴァーシティ・コレッジ・ダブリン) で教育を受けながら、信仰にたいしては懐疑的にならざるを得ず、そのいっぽうにおいて、一貫してスコラ哲学 (特にトマス・アクィナス) に思想的な拠り所を求め続けた、ジョイスの基本姿勢にほかならない。書名こそ明記されていないものの、アメリカにおけるジョイス研究の礎を築くとともに、学界自体の国際的評価を高めることにも寄与したものと目されてよいレヴィンの記念碑的著作『ジェイムズ・ジョイス——批評的序説』(1941年)¹⁷⁾が参看されたことは明らかであろう。

ウィルソンは、十九世紀後半以降のヨーロッパ文学の遺産、とりわけ象徴主義の系譜と根強い関連性を有する藝術的な達成としてジョイスのテクストを読もうとした。レヴィンの学問的姿勢もまた、その延長線上にあるものとして理解し得るだろう。その両者とやや対照的な方法が採られているのが、ナボコフが具体的に書名を挙げている二冊の研究書、リチャード・M・ケインの『物語的な航海者——ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」』(1947年)¹⁸⁾とパトリア・ハチンズの『ジェイムズ・ジョイスのダブリン』(1950年)¹⁹⁾——「魅力的な本」(Nabokov 1980: 302)とナボコフは呼んでいる——である。そこにあっては、『ユリシーズ』が、現実の都市を自然主義的に表象したテクストであるということ——そのこと自体は誰しもが否定し得ないと思われるにせよ——に主眼が置かれているといえるだろう。

いずれの場合にかんしても、ナボコフは、個々の先行研究の方法論的特質を明確化することに特段の関心を寄せてはいない。しかしながら、彼は、『ユリシーズ』が特殊と普遍を共存させた稀有なテクストであること、そこで展開される物語が、1904年六月十六日木曜日という特定の日におけるダブリンの実像そのもの、その場で現実には生起した事象、そこに生きた人びとが経験し、知り得たすべてのことがら——「歩き、乗車し、坐り、話し、夢を見、酒を飲み、大なり小なりの生理学的、心理学的な営みを経験する相当数の登場人物たちの混合しつつ個別化した生」(Nabokov 1980: 285)——と不即不離の関係にあることをじゅうぶんに認識していたのだ。

そうである以上、現実そのものに着目し、虚構上の中心的登場人物であるリーオポウルド・ブルームとモリー・ブルーム夫妻の住居とされるエクルズ・ストリート七番地にかんして、1904年にはそこが空き家であったこと²⁰⁾を確認するなどして、ジョイスの創作方法の徹底性をそれに見合うように徹底的に検証しようとする種類の研究も、理路として、方向性として存立し得ることをナボコフは認めていたに相違ない。いかなる意味合い、いかなるニュアンスであろうと、細部に拘ることそのものは、彼自身が提唱する精緻な読解²¹⁾と大幅に齟齬しているわけではないからである。

「『ユリシーズ』は二十六万語以上からなる分厚い書物である。それは、およそ三万の語彙を有する潤沢な書物だ。ダブリンという舞台設定は、部分的には亡命者の記憶によって供給された資料のうえに築きあげられてはいるものの、主として『トム編ダブリン市住所氏名録』から得られた資料を基盤としている」と述べる時、ナボコフは、ケインが実際に1904年版『トム編グレート・ブリテンならびにアイルランド連合王国公式住所氏名録』²²⁾にあたりつつ、事項の詳細な索引化を行なっていることを念頭に置いていると見てよい。

その後が続く、「彼〔ジョイス〕が全巻を通じて活用しているのは、一部半ペニーの『イーヴニング・テレグラフ』紙1904年六月十六日木曜日号であり、そこではなによりもまず、アスコット・ゴールド・カップ（一着は穴馬のスローアウェイ）、アメリカで起こった最悪の大惨事（遊覧汽船ジェネラル・スローカム号の火災²³⁾）、そしてドイツのホンブルクで開催されたゴードン・ベネット・カップを競う自動車レースが目玉記事となっている」という記述もまた、ケインの著書を踏まえたものであろう。

とはいいながら、その本から与えられた知見としてナボコフが直接的に言及しているのは、1904年六月十六日とは「ジョイスが未来の妻であるノーラ・バーナクルと出会った日」（Nabokov 1980: 285-86）²⁴⁾にほかならないという一事に限られている。この情報のみが有益で、それを除くとすれば、「善意ある」著作ではあるものの、全般的には「貧弱」だというのがナボコフの見解なのだ。そのような決めつけがなぜ必要なのか推し量ることは困難である。だが、彼にとっては、自分が必ずしも先行研究を受け容れているわけではないこと、全面的に否定したり批判したりする必要までは感じていないにしても、少なくとも一線を劃そうとしていることだけは、是非とも明示しておかなければならない、譲れない点であったのかもしれない。

おそらくナボコフは、『ユリシーズ』をアイルランドという文脈から離脱させて、近代におけるヨーロッパ文学の潮流に棹さすものとして論じようとする立場と、それを胚胎させた想像力が、1904年六月十六日のダブリンという特定の時空に根差したものであるという事実にはひたすら関心を注ぎ、そのことを可能な限り深く突き詰めようとする立場²⁵⁾という、ふたつの批評姿勢が成立し得ることを承知しつつ、そのいずれかに与することを慎重に避けようとしている。そのいっぽうにおいて、彼が断固として異を唱え、妥当性を完全に否定しようとしている見かたがあることにも留意しておかなければならない。

2. 放浪という主題

「『ユリシーズ』が壮麗にして永続的な構造物であることは確かだが、藝術作品それ自体よりも観念や一般論や人間的側面のほうに興味をいさぐ種類批評家によって、少しばかり過大評価されてきたところがある」（Nabokov 1980: 287）とナボコフはいう。「ダブリンのある夏

の一日におけるリーオポウルド・ブルームの月並みな放浪と取るに足りない冒険のうちに……『オデュッセイア』の綿密なパロディを見て取るようなことは特に戒めなければならない。」(Nabokov 1980: 287-88) その言葉に忠実に従うならば、『ユリシーズ』が『リトル・レビュー』誌に連載されていた当時、十八の挿話のそれぞれにホメーロスの叙事詩『オデュッセイア』に由来する標題²⁶⁾が付されていたことなどを一義的に重視するには及ばないということになる。

「この長篇小説の標題が示唆しているように、ブルームの場合にも、放浪の主題という、非常に臆気な、非常に漠然としたホメーロスの反響があることは明白である」(Nabokov 1980: 288) というところまでは、ナボコフも認めている。さらにまた、「書物の進展につれて現われる多くの引喩のうちに相当数の古典の引喩が含まれている」ことも確かだ。しかし、「この書物のあらゆる登場人物、あらゆる場面のうちに古典との密接な並行関係を探し出そうとするのは完全な時間の浪費であろう。使い古された神話に依拠した、長々しい、持続的な寓意ほど退屈なものはない。この作品が分載されたあと、ジョイスは、退屈な学者や似非学者たちがなにかまけているかに気づき、ただちに各章の擬似ホメーロスのような標題を抹消したのだった。」

よく知られているように、『ユリシーズ』が単行本として出版される以前にジョイスは、作品の理解を助ける目的で、『オデュッセイア』と関連した各挿話の標題とともに、それぞれの挿話が表象する場面、時刻、器官、学藝、色彩、象徴、技術を列挙した計画表と呼ばれるものを作成していた²⁷⁾。ナボコフにいわせるならば、その表は「冗談半分」にすぎない。にもかかわらず、「スチュアート・ギルバートという退屈な男」がそれにまんまと乗ぜられて、章ごとにひとつの器官(「耳、眼、胃など」²⁸⁾)が支配的役割を果たしていることを見いだしたのだとされる。

このナボコフの言葉自体がなかば冗談のようなものであって、彼が暗に批判対象としたギルバートの著書『ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」——ひとつの研究』(1930年)²⁹⁾は、それほど単純な内容のものではないといわなければならない。著者であるギルバートは、計画表中の器官という項目——最初の三つの挿話では空白となっていて、第一に記されているのは、第四挿話「カリュプソー」の欄に含まれた腎臓という語である——をテキスト読解の手掛かりとしているわけではない。そこにあっては、『ユリシーズ』と『オデュッセイア』の照応関係が詳細に論じられるとともに、『ユリシーズ』の全体的構造の見取り図と、各挿話の文体上、表現技法上の特徴が示されているのである。

ともあれ、ナボコフが、ホメーロスとの関連性をはじめとして、ジョイス自身が計画表によって暗示しようとした数々の仕掛けを敢えて黙殺するように働きかけていることには、なんらかの動機があったと見るべきであろう。問題視されているのはおそらく、ジョイスの構想そ

のものではなく、むしろ、それを解釈の枠組みとして墨守し、作品にたいするある特定の接近方法を絶対的な秘儀のようなものとして祭りあげ、固定化しようと図る一部の批評家の姿勢なのではあるまいか。「あらゆる藝術はある意味で象徴的である」ということはナボコフも認めている。しかし、「藝術家の巧緻な象徴を故意に銜学者の陳腐な寓喩に変えてしまう批評家」にたいしては、「泥棒だ、捕まえてくれ！」と呼びかけざるを得ないというのが彼の偽らざる見解なのだ。

1969年六月二十六日、『ヴォーグ』誌の副編集長アリーン・タルミーから送られた質問項目に答える形で行なわれたインタビュー³⁰⁾においても、ナボコフは、コーネル大学で講義を担当していた当時を振り返りつつ、「一般観念」は無益であるということを強調するとともに、授業において自分は専ら「細部にかんする正確な情報」を学生たちに与えるべく努めてきたと述懐している。細部が結合されることがなければ、書物の生命に欠かすことのできない「官能的な煌めき」は失われてしまうというのである。さらに言葉を続けて、ナボコフは、「ホメロス、色彩、器官に因んだ各章の見出しという勿体ぶった戯言を永久化する代わりに、教師は、ブルームとスティーヴンの互いに絡み合う行程を明瞭に迎れるようにした、ダブリンの地図を用意すべきである」と主張したのだった³¹⁾。

実際にナボコフは、ダブリン市内におけるブルームとスティーヴン・デダラスの移動、知人やその他の誰かとの遭遇、そのなかでももっとも肝要といえるふたりの邂逅を、点と線によって丹念に図示したことがあった。結果的に、その図が、『オデュッセイア』におけるオデュッセウスの放浪を地中海地域の地図上に表わしたものを髣髴させる外見を帯びるようになったのは、いささか皮肉な巡り合わせといえるかもしれない。ともあれ、そうした顛末によって端的に示されていることがあるようだ。

ナボコフの作品論は、多くの『ユリシーズ』論とは異なって、この長篇小説の基本単位を挿話ではなく章と呼び、通称として用いられることの多い標題も完全に無視するという、徹底した方針を貫いている。だが、そうした配慮にもかかわらず、結局のところ、そこには、彼が『ユリシーズ』のテキストから『オデュッセイア』との関連性を全面的に払拭するという至難な課題にいかに取り組んだかということが、それ自体痕跡として留めてられてしまっている。そのことは、単行本化された『ユリシーズ』において採用された（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲというローマ数字でしづけられている）三部構成のもつ意味合いについて、ナボコフが特に明快な考えを示していないという事実によって、逆説的に証されているということもできそうだ。

ジョイスは、弁護士であり後援者でもあったジョン・クインに宛てた書簡（1920年九月三日付）のなかで、第一部「テーレマキア」（オデュッセウスの息子テーレマコスの名に由来する）（第一、第二、第三挿話）、第二部「オデュッセイア」（別題「ユリシーズの放浪」）

(第四 - 第十五挿話)、第三部「ノストス」(帰還を意味するギリシア語)(第十六、第十七、第十八挿話)という三部からなっているものとして、みずからの作品の内容を見出しとともに簡略化して紹介している³²⁾。出版にさいして、各部の呼称は除かれることになったものの、ジョイスが当初思い描いていた三部構成が、ホメーロスの叙事詩の構成にかんする伝統的解釈をそのまま踏襲したものであった点は一考に値しよう。

ナボコフは、その点を完全に度外視している。そのためもあって彼は、『ユリシーズ』の各部に見られる物語としてのまとまりについても、作品全篇の主題論的展開についても、じゅうぶんに説得力のある見解を呈示することができずにいるように思われる。また、そのことと軌を一にするように、彼は、作品の基盤をなしている、古代と現代を通底させ、現代の混沌たる不定形の事象を把握するために古代の創造物を利用しようとする発想³³⁾や、原型的物語が文学的想像力を活性化させる可能性などに思いを致すこともなかったようだ。さらにいうならば、この作品の三部構成が、ナボコフの講義においてジョイス以前に取りあげられてきたフローベールの『ボヴァリー夫人』やカフカの『変身』と共通したものであることも等閑に付されている。彼の関心は、そもそものはじめから別の方向に向かっていたのである。

「『ユリシーズ』は三人の主要登場人物たちをめぐって構築されたいくつかの場面からなっている」(Nabokov 1980: 286)とするとところにナボコフの議論の要点があることは疑いない。つまり、この作品の長篇小説としての構造は、三つの部分、ならびにそのそれぞれの下位区分をなす個々の挿話相互間の繋がりとしてではなく、三人の主要登場人物たち——リーオポウルト・ブルーム、スティーヴン・デダラス、マリオン(モリー)・ブルーム——を中心ないしは焦点とする複数の場面の連続として捉えられることになるわけである。しかも、それら三者の関係は、「三連祭壇画」³⁴⁾に擬えられながらも、決して対等なものとしては把握されていない。ブルームが「中心的人物」であるのにたいして、他のふたりは「両側に位置する人物」とされ、巻頭にはスティーヴンが、巻末にはモリーがそれぞれ配置されることにより、全体的な枠組みがかたちづくられていると見なされるのだ。

『ユリシーズ』の第一部をなしている三つの挿話——「テーレマコス」、「ネストール」、「プローテウス」——において主人公としての役割を果たしているのはスティーヴンである。第二部においても、第九挿話「スキュレーとカリュブディス」で描かれる国立図書館の場面で、スティーヴンが語る『ハムレット』論に主眼が置かれたり、第十挿話「さまよう岩々」ではスティーヴンとブルームがさまざまな人物たちと同様、点景的に登場したりする。それらの事情を勘案するならば、ブルームひとりのみを中心的人物として位置づけるのではなく、スティーヴンもそれと同等の存在なのだとする解釈も成立し得ることは論を俟たない。

第二部の最後に近い第十四挿話「太陽神の牛」で、ホリス・ストリートの国立産婦人科病院

に入院中のマイナ・ピュアフォイを見舞うため訪れたブルームが、偶然、待合室で医学生たちと酒を酌み交わしていたスティーヴンと遭遇し、その後、ふたりが行動をともにすることになることが、筋立てのうえで重大な転換点となっていることも強調されてよいだろう。『ユリシーズ』全篇が、「再帰する主題群と瑣末な事象の同時生起という周到なパターン」(Nabokov 1980: 289) にほかならないということはナボコフも指摘している。時を同じくして、同じダブリン市内を漫ろ歩いていたふたりの人物が、長時間巡り会うことなく、一瞬見かけることがあったとしても、互いに相手を(さほど)意識することもなく、ある時点でついに会おうに到るという劇的展開こそが、物語の要諦となっていることは確かなのだ。にもかかわらず、ナボコフは、なんの迷いも躊躇いもなく、ブルームを単一の主人公として論じる立場に固執するのである。

そのような主張は、実際の講義のなかではさらにいっそう強調されていた可能性がある³⁵⁾。とはいえ、講義録から読み取り得る範囲においても、ブルームが他のふたりの主要登場人物よりも(たんにもっとも多くの場面に登場しているからというだけでなく)重視されなければならない理由と、ブルームの放浪(あるいはむしろ遍歴であろうか)こそが『ユリシーズ』と呼ばれる作品の主題そのものであるとする立脚点を明確にしようとするナボコフの意思は、じゅうぶんに理解し得るものと思われる。彼によれば、ブルーム、スティーヴン、モリーの三者はそれぞれに「藝術家的な側面」(Nabokov 1980: 286)を備えている。しかしながら、各自の教養の程度には自ずから落差があり、スティーヴンが知識人(ハイブラウ)、ブルームが俗物(ミドルブラウ)、モリーが無教養人(ロウブラウ)という類型をそれぞれに体現していると考えられる。

そのうち、スティーヴンの場合にかんじていえば、藝術家的資質があまりにも際立ちすぎて真実味に欠けているというのがナボコフの意見である。いっぽう、モリーには、その「陳腐さ」、「考えかたの因襲性」、「低俗さ」にもかかわらず、「表面的には魅力的に思える人生の楽しみごと」にたいして「豊かな情緒的反応」(Nabokov 1980: 286-87)を示すことができるという特質がある。第十八挿話「ペーネロペイア」におけるモリーの内的独白の最後の部分³⁶⁾にそのことがよく表われているといえるだろう。

それら両者に比して、ブルームは常識的で、場合によっては凡庸な人物であると捉えられがちだが、果たしてそうであろうか。じつのところ、彼はスティーヴンほどの藝術家ではないにしても、批評家たちが認めている以上に藝術家らしいところがある。ブルームのものとする意識の流れは、時としてスティーヴンに帰せられたものと酷似することがある。ジョイス自身が、「一般人」(Nabokov 1980: 287)として形象化しようとい図していたにもかかわらず、どう見ても、ブルームという人物は「一般人」という枠に収まる存在ではないのだ。「性的部門においてブルームが、異常に陥る寸前とまではいわないにしても、少なくとも、ありとあらゆる

る種類の合併症をともなう極端な性的執着ならびに倒錯の好個の臨床例であることは……明白だ。」ジョイスがテキストによって具現しようとしたことがらの大部分がブルームひとりに集約された結果、そのような事態がもたらされたのだと考えることも可能であろう。

3. 異邦人とその運命

スティーヴン・デダラスの年齢は、1904年の時点におけるジョイスと同じ二十二歳と設定されている。その事実を強調するためなのか、ナボコフは、「若い」という形容詞を繰り返して用いつつ、この登場人物の性格づけを試みている。彼の見るところ、「ダブリンの若い学校教師、研究者、詩人」(Nabokov 1980: 286)で、かつては「イエズス会が行なう教育の規律」に従属していたものの、現在はそれに激しく抵抗しているスティーヴンは、それでもなお「本質的には形而上学的な性格」を保ち続けている、「どちらかといえば抽象的な青年[若い男性]」である。

それぞれの場面や状況において「酒に酔っているときですら独断家」、「自己のうちに閉じこめられた自由思想家」、「抽象的、警句的な言辭」の使い手として振る舞う彼にかんして、読者は、「辛辣で、傷つきやすい青年[若い男]」という印象を受けるだろうとナボコフはいう。だが、その人物像を明確に視覚化できるまでには到らない。スティーヴンは、「芸術家の想像力によって創造された温かみのある新しい存在というより、作者自身の心の投影」にすぎないのだ。批評家たちはスティーヴンを「若いジョイス本人」と同一視する傾向があるけれども、そのことが特に重要というわけではない。それよりもむしろ、生い立ち、父母やその他の家族との関係、思想、信条など、あらゆる面において作者自身と共通しているこの登場人物が、それゆえの限界性を免れ得ないという点を、われわれは銘記すべきなのではあるまいか。

いってしまうならば、スティーヴンには虚構上の登場人物、とりわけ長篇小説の主人公に必要なとされるような魅力にやや欠けているということになるのかもしれない。それにたいしてブルームは、一見したところ、作者そのひととはきわめて対極的な存在として造型されているかのようなのである。ハンガリー出身のユダヤ人を父にもつブルームについて、ナボコフは、以前講義で取りあげたことのあるプルーストの長篇小説『スワン家のほうへ』の主要登場人物のひとり、シャルル・スワンがユダヤ人として設定されていることと比較している。

株仲間買人の息子として生まれながら、上流階級の花形として脚光を浴びる存在にまでなりおおせたスワンは、「個性的な、独自の特色を有する個人」(Nabokov 1980: 287)として描かれてはいるものの、彼がユダヤ人の息子であることは、畢竟、たんなる偶然でしかない³⁷⁾。本人がそのことを自覚している様子はなく、テキストもまたそのことを問題として前面に浮上させたりはしないのである。その点からしても、『ユリシーズ』におけるブルームの出自ならび

に民族的背景にかんする設定は、『スワン家のほうへ』の場合とは根本的に異なる事情に由来するものであると指摘しておかなければならないだろう³⁸⁾。

ジョイスは、「みずからの生まれ故郷であるダブリンという土地に特有のアイランド人たち」のうちに、彼自身と同じくらいにアイランド的でありながら、彼自身と同じように亡命者であり、「羊舎のなかの一匹の黒い羊」であるような人物を配置する必要があったのではないかというのがナボコフの論点なのだ。そのためにジョイスは、局外者の類型として、亡命者の類型でもある「彷徨えるユダヤ人」³⁹⁾という原型的人物像を選択するという合理的な計画を展開することにしたのだというわけである。

ここでナボコフは触れていないが、第二挿話「ネストール」において、ステイーヴンが勤務しているドーキーの学校の校長ギャレット・ディージーが、アイランドが「ユダヤ人を迫害しなかった唯一の国」(U2. 438)として称えられているのはなぜかと問い掛けていたことを思い起こしてみることも無駄ではあるまい。彼は、冗談めかしながら、その理由とはアイランドが「彼ら [ユダヤ人] を国内に入れなかった」(U2. 442) ことにあると嘯くのである。

このようにして、ブルームが直接介在しない場面にあっても、反ユダヤ主義的言説が諸処に伏在していることが示される⁴⁰⁾。そのことから暗に読み取れるとおり、『ユリシーズ』が表象する世界が、徹頭徹尾、偏狭な価値観によって支配されていることは否定できない。ブルームは、ハンガリー出身(ソンバトヘイ生まれ)の父ルードルフ・ヴィラグ⁴¹⁾が、「ヴィーン、ブダペスト、ミラノ、ロンドン」(U17. 535)を経て、ダブリンに移住したのち、プロテスタントに改宗したため、生まれながらにしてユダヤ教徒ではなく、さらにモリーとの結婚にさいして、カトリックに改宗している。にもかかわらず、理不尽なことに、彼は周囲から一貫して異邦人であるかのように遇されているのだ。

「彷徨えるユダヤ人」という、ナボコフが引き合いに出していた、民間伝承に由来する形象にかんしていえば、それに該当するのはブルームよりはむしろ、その父のほうであろう⁴²⁾。多くの土地を放浪しなければならなかった父の生涯と、安息の土地を得ることのない民族の運命全体が、不合理にもブルームひとりによって担われているかのようにさえ思われてくるのだ。そうした状況を勘案するならば、旧弊な社会によって疎外されているブルームと、たとえ明白に疎外されていないにせよ、ある種の疎外感を鬱積させ、みずからとその社会とのあいだに距離を置くことを余儀なくされているステイーヴンが、なんらかの共感によって結ばれる可能性があり得ることも、いちおうは認めておいてよいのではないかと思われる。また、両者がそれぞれに、理念上の息子、理念上の父を探求する途上にあるものと仮定するならば、その点においても両者は結び合わされてよさそうである。

しかし、ナボコフのような見かたを取るとすれば、ブルームとステイーヴンが共通項によっ

て括られる可能性は議論の埒外に置かれることになる。もしくは、スティーヴンにたいするブルームの一方的な気遣いこそが両者の関係の基盤にほかならないことが、揺るがしがたい前提として暗に維持されることになる。この点においても、ブルームが『ユリシーズ』全篇における単一の主人公であるとする立場が貫かれていることは疑いない。彼とスティーヴンとの繋がりが、一定の主題論的機能を有していることは間違いないにしても⁴³⁾、それは、単一の主人公を中心に据えた全体的展望の一劃をなしているにすぎないことになるのである。

ナボコフの考えに従うならば、『ユリシーズ』の「中心的主題」(Nabokov 1980: 286)はきわめて単純なものであることになるが、それは、以下のような、時間意識と関連した三つの項目にもとづいて割り出される。「1. 二度と手にはいらぬ過去」。ブルーム夫妻の第二子、十一年まえ(1893年十二月二十九日)に誕生し、生後十一日で亡くなった息子(ブルームの父に因んでルードルフと命名され、ルーディと呼ばれている)にかんする記憶のことが意味されている。「その子の像は彼[ブルーム]の血と頭のうちに残存している。」

「2. 嘲笑すべき悲劇的な現在」。いまもなおブルームは妻のモリーを愛してはいるのだが、そのいっぽうでは、運命が勝手気儘に振る舞うままに放置しておこうとしているのだとする指摘である。もっとも肝要な点としては、彼が、物語中の出来事が設定されたその日の午後四時半、歌手である妻モリーの演奏会を企画している興業主兼マネージャー、プレイゼズ・ボイランが密かに妻を訪ねる予定であることを密かに承知していることが挙げられる。それにもかかわらず、ブルームは手を拱いたまま、妻の不貞を未然に防ごうとはしない。「彼は、運命の邪魔をしないよう細心の注意を払おうと努めてはいるのだが、実際には、その日一日をとおして、引切りなしにボイランと出くわしそうになりかける。」

「3. 哀れを誘う未来」。ここで浮かびあがるのは、ブルームがもうひとり、一日をつうじて出くわしそうになるスティーヴンと自分たち夫婦の関係について、思い描くこととなる将来像である。ブルームは徐々に、これもまた運命の「ささやかな心遣い」なのではあるまいかと思ひ定めるようになるのだ⁴⁴⁾。妻がどうしても愛人をもたなければならないのだとすれば、「感受性豊かで藝術家肌の」スティーヴンのほうが、俗悪なボイランよりもずっとましであろう。実のところ、スティーヴンならばモリーにいろいろなことを教えることができるはずだ。歌手という職業にとって必要不可欠なイタリア語の発音(U 17. 939)についても手助けしてくれるに違いない。要するに、スティーヴンは、モリーを洗練させる影響力の源となるのではないか。

「哀れにも」ブルームはそんなふうを考えているのだとされる。ナボコフが述べているのはそこまでだが、スティーヴンがブルームの申し出を受け容れる見込みはあまりなさそうであり、彼になにを期待するにせよ、ブルームの孤独が解消されるきっかけとなるようには思われぬということも付言しておいてよいだろう。

以上の三点にもとづきつつ、ナボコフは、『ユリシーズ』の中心的主題とは「ブルームと運命」ということなのだと結論づける。そこにあつては、探求者としてのブルームの孤独あるいは孤立に焦点が置かれ、専ら強調されているように思われる。その点に関連していうならば、この講義から数年後に構想されたナボコフの長篇小説『ロリータ』（1955年、1958年）⁴⁵においても、同様の主題——「ブルームと運命」に倣って「ハンバート・ハンバートと運命」と呼ぶこともできようか——が展開されているのは興味深いことである。運命（fate）という語を用いるとき⁴⁶、ナボコフは、しばしば頭文字を大文字化して“Fate”と綴り、擬人化ないしは神格化を施しているが、『ロリータ』においては、それをさらに「マクフェイト」という架空の人名に置き変えて、運命があたかも登場人物のひとりとして立ち現われているかのように装う場面もあるのだ。

『ユリシーズ』と同様に、「二度と手にはいらぬ過去」、「嘲笑すべき悲劇的な現在」、「哀れを誘う未来」をめぐる物語として読むこともできる、ナボコフの長篇小説の主人公＝語り手であるハンバートは、年齢の点ではブルームに近く、知性や教養の点ではステイーヴンに近いと見られる。それらのことがらをはじめとして、『ロリータ』においては、『ユリシーズ』に含まれた種々の物語的構成要素がさまざまに組み換えられ、変形されていると解釈することは容易であるものの、おそらくその点が特に重要というわけではあるまい。留意しておいてよいのは、ブルームとは異なり、ハンバートが（クレア・キルティのような）『ユリシーズ』でいえばボイランにあたる存在を許容することはあり得ないという決定的な落差が認められることであろう。

いかたを換えるならば、運命をいかにして受けとめるかという姿勢にかんして、ふたつの作品のあいだには根本的な差異があるということにほかならない。『ロリータ』にあつては、運命とは、ひとの前途に立ち塞がり、あらゆる見込みを狂わせる外在的な支配力を意味している。そこにみずからへと向けられた潜在的な悪意を察知するハンバートのような人物は、運命に抗い、苦心惨憺してその機先を制そうとする（そして失敗に終わる）。

ハンバートが嘗めなければならぬような辛酸や苦難は、『ユリシーズ』のブルームとは無縁のものといえよう。彼の意識に映し出される運命の働きかけは、あるがままに、時として感謝すべきことであるかのごとく受けとめられているようにさえ思われる。それが意識されるのは、事前には思いも寄らなかった機会を与えられたかのようにひとが感じ、振り返ってみて、その後の出来事があらかじめ予定されていたことだったのではないかと熟々感慨に耽らずにいられなくなるまでである。

そうした局面は、それ自体が偶然生起する。第十一挿話「セイレーン」の舞台となるオーモンド・ホテルの食堂で、ブルームは、秘密の文通相手であるマーサ（Martha）・クロフォード

の手紙にたいする返事を書こうとしている。そのとき、フリードリヒ・フォン・フロトーの歌劇『マルタ』(Martha、1847年)のアリア(「夢のように」あるいは「マッパリ」[U 11. 587])⁴⁷⁾が特別室から聞こえてくる。それを耳にしながらかブルームは、いま自分が思い浮かべている女性の名前とその歌劇の女性主人公の名前の「偶然の一致」(U 11. 713)に心を動かされずにはいられない。

それとともに、そのアリアの一節(「はじめて私とその愛らしい姿を見たときに」⁴⁸⁾ [U 11. 24, 665])からブルームが思いをめぐらすのは、自分と妻モリーとの最初の出会いは運命だったのではないかということである。「椅子取りゲーム。われわれふたりが最後まで残った。運命。彼女を追って。運命。」(U 11. 726)このような、楽天的ともいえるほど達観した、運命にたいする受けとめかたが一貫しているのだとすれば、ブルームにとって、そして『ユリシーズ』という作品にとって、過去、現在、未来は、ナボコフがいうほど悲しげな、哀れを感じさせるような性格のものではないように思えてくるのではないか。

いずれにしても、三人の中心的登場人物をはじめとする各登場人物の結びつき、過去、現在、未来の連関など、各要素の相互関係を克明に浮きあがらせ、そのそれぞれを極小から極大に到るまで隙間なく連動させようとするのが、この『ユリシーズ』と呼ばれる稀有なテキストの特性であり、卓越性でもあることは、紛れもない事実であろう。ナボコフの言にしたがうならば、ここでは、各登場人物たちが「運命のゆったりとした舞踊のようなものをかたちづくる周到な構成の生きた一部として、往還し、離合し、ふたたび出会う。」(Nabokov 1980: 289) そのさまをテキスト上に実体化させるためにどのような手立てが講じられているかを、われわれは検討してみなければならなくなるだろう。

4. 注意と共感

周知のとおり、『ユリシーズ』の各挿話は、それぞれ異なる文体、異なる表現様式によって書かれている。なぜそのようなことが必要とされるのか。「特別の理由」(Nabokov 1980: 288)などないというのがナボコフの答である。だが、「このような視点の持続的な変移は、異なる方向からより多彩な知識、新鮮で鮮明な見えかたを伝達するものと論じることもできよう。」(Nabokov 1980: 289) 両脚のあいだに頭をさげて背後を覗いてみれば、世界が逆さまに見えるようなものである。「眺望を変え、プリズムと視点を変えるこの詭計は、ジョイスの新たな文学技法、草がより緑に、世界がより新鮮に見えるようにしてくれる類の新たな捻りに比することができるだろう。」

視点という語の用法にはやや疑問が感じられるはするものの、要するに、ナボコフは、文体について論じながら、文体の変化によってパースペクティブの変化が可能となるという方向に

話題を転換しているのだ。むしろそこにあっては、現実の見えかたそのものを多様化し、場合によっては日常的なものから非日常的なものへと置き換えようとする、テキストの全般的志向も考慮に入れられているものと見なければなるまい。ジュリアン・モイナハンは、ナボコフが、ヴィクトール・シクロフスキイやロシア・フォルマリズムの理論を参照することなく（あるいはそれらとはまったく別個に）、独自の論法で異化効果に触れているものと考えている⁴⁹。そのことを踏まえていうならば、ナボコフのいう視点の概念は、通常考えられるような登場人物にかかわる問題としてではなく、作者の求める多様性、あるいは作者が想定している語り手の機能の多様性と関係づけられるべきものとして理解される必要があるようだ。

登場人物の意識を代替し、その知識、教養、知性、思考様式などといったすべてを仮想現実的にテキスト上に現前させようとすることは、『ユリシーズ』のテキストが全体としてめざす目標のひとつであると見なすことができる。だが、それは飽くまでも、作者自身の想像力を原点としつつ、偏在し、変幻自在に立ち回る語り手を經由して達成されることなのだ。そのさいに枢要な役割を果たしているのが、ジョイスが駆使する巧緻を極めた文体であることは間違いない。ナボコフによれば、『ユリシーズ』の文体は、大きく見て、以下の三種（「三つの主要な文体」）に分類することができる。

「1. 本来のジョイス」。第一挿話「テーレマコス」、第四挿話「カリュプソー」、第六挿話「ハーデース」⁵⁰で用いられている「直截、明晰かつ論理的で、しかも寛闊な」文体である。

「2. いわゆる意識の流れ、もっとうまくいえば意識の飛び石を表わす、不完全で、急速で、断続的な語法」。例としてもっとも著名なものは、いうまでもなく第十八挿話「ペーネロペア」におけるモリーの独白であろう。この文体にかんしてナボコフが疑問を感じているのは、それが「思考の言語的側面」を誇張しすぎているように思われる点である。意識の流れは、記録可能な語の流れ——語と文の絶え間ない連鎖といい換えてもよいだろう——を前提としているが、人間の思考は常に言語のみを媒介としているわけではなく、イメージに頼ることも間々あるはずだからだ。

「3. さまざまな非小説的形式のパロディ」ならびに「文学的文体と作者のパロディ」（Nabokov 1980: 289-90）。ナボコフが挙げている「非小説的」文体の例としては、第七挿話「アイオロス」における新聞の見出し、第十一挿話「セイレーン」における音楽⁵¹、第十五挿話「キルケー」における「神秘主義的⁵²でスラプスティック的なドラマ」、第十七挿話「イタケー」における教義問答のパターンに倣った質疑応答がある。「文学的」文体としては、第十二挿話「キュクロプス」における「戯作風の語り手」、第十三挿話「ナウシカアー」における「女性雑誌型の書き手」、第十四挿話「太陽神の牛」における「特定の作者と文学史上の年代の連続」、第十六挿話「エウマイオス」における「優美な新聞雑誌文体」が挙げられている。

各挿話ごとに異なる文体ならびに表現様式を導入するという意匠が凝らされるいっぽうで、随所にジョイス自身の文学的個性が如実に現われていることも見落としてはならないだろう。

「文体をさまざまに切り替えながら、あるいは所与の範疇のうちに留まりながら、任意の箇所において、ジョイスは、おおむ沈鬱な情緒を表わす目的で、頭韻や浮き立つような修辭的技巧を用いつつ、音楽的、抒情的な調子を導入することによって気分を増大させる。」(Nabokov 1980: 290) 「詩的な文体」は、しばしばスティーヴンに結びつけられるようにして用いられるが、それは場合によっては、ブルームと関連する場面で用いられることもある。ここでナボコフが引用しているのは、第五挿話「食蓮人たち」の一節である (U 5: 300-02, 316-17)。

それらの箇所以外でジョイスが手立てとして選び得るのは、「ありとあらゆる種類の言語的な詭計」、すなわち、「洒落、語の置き換え、言語的反響、動詞の奇怪な結合、あるいは擬声語」である。それらのうちにナボコフは、ある種の弱点ないしは不都合があると見ているようだ。それらの言語的手段の場合も、「地元にかんする [ダブリンにかんする] 引喩や外国語表現⁵³⁾の過剰さ」の場合と同様、「細部がじゅうぶんな明瞭さをもって浮き彫りにされることなく、ただ博識家にだけわかるように示唆されるにすぎないことから、不要な曖昧さがもたらされる」(Nabokov 1980: 290) というところが問題視されているのである。

各挿話の具体的分析に移行すると、ナボコフが『ユリシーズ』のどこに魅力を感じているのかが徐々に判明してくる。すでに触れたように、彼は、中心的登場人物たちの心理描写（一般に意識の流れと呼ばれているものを含む）について、ひとが頭に思い浮かべるすべてが言語的手段によって表象し得るものなのかという疑問を呈していた。しかし、ジョイス以前の文学的テキストに見られるような、叙述全般の一元的な統禦（たとえばプルースト的な語り手によってなし遂げられるもの）とは完全に一線を劃した、「この思考の流れという技法」(Nabokov 1980: 297) には「簡潔さという利点」があることも認めなければならない。それによって与えられるのは、人為的に整理され、調整され、論理づけられた叙述とは対照的な、「脳によって書き留められた一連の短いメッセージ」なのだ。それは、一般的な叙述よりも多くの「注意と共感」を読者に求める種類のものである。

「外的印象に促されて表面に浮かんでくる内的思考が、思考する者の心のなかで、意味深長な語の結合、言葉の連結へとつながってゆく」例として、ナボコフは第一挿話から、「鈍い緑色の液体の塊」を抱えこんでいる「湾と水平線のつくる環」(U 1: 107-08) が、スティーヴンの思考のうちで、母の腐りかかった肝臓から引き剥がされた「緑色のどろりとした胆汁」が溜まっている、彼女の死の床の傍らに置かれていた「白い陶器のボウル」(U 1: 108-09) へと置き換えられ、さらには、それが、剃刀の刃を拭うためにマリガンが借りた、鼻汁のついたスティーヴンの手巾 (U 1: 69, 70-71, 111) に結びつくことによって、(石鹼を泡立てるために使わ

れているニッケル製のボウル [U 1: 1-2, 4, 18, 38, 306, 319] などを含めた) すべてが一瞬のあいだ、ひとつのイメージに融合される箇所を取りあげている。「これこそが最良のジョイスである。」

第一挿話のこの場面でマリガンは、スティーヴンを指して「哀れな使役犬」(U 1: 112) と呼んでいる。その発言を念頭に置きつつ、ナボコフは、スティーヴンが犬に、ブルームが猫に擬えられる主題論的機構があることを指摘する。それにかんしては、人種的偏見の主題と同程度に重要ではないかと思われる、動物その他にたいする気遣いという主題⁵⁴⁾と関連するものとして論じるという可能性も考えられるだろう。「彼の [ブルームの] 主要な特徴のひとつは、動物にたいする優しさ、弱者にたいする優しさである。」(Nabokov 1980: 314) 朝食の席でブルームが黒猫にたいして示す態度(U 4. 15-48)や、亡き父の愛犬アトスのことを思い起こして、呼び醒まされる感情の動き(U 6. 125-28)が例となるはずである⁵⁵⁾。「彼は、人間によって貶められ、人間によって傷つけられる動物たちにたいして痛切な同情を感じているのだ。」

その点を敷衍して論じるとすれば、ナボコフが別の文脈において言及していた「注意と共感」をさらに展開させてみる必要が生じてくることだろう。もしわれわれが、ブルームの同一性をユダヤ人という出自のみに限定させて定義づけるのだとすれば、われわれもまた、彼を取り巻くダブリンの人びとと同じ陥穽に嵌まりこんでいることになるに違いない。彼が弱者に同情や共感を寄せる背景として、ユダヤ的なものは特に関係していないからである。

ブルームの人間性、とりわけその寛容さは、『ユリシーズ』のなかでひとつの極限をかたちづくっているということになるのかもしれない。ブルーム家に招き入れられたスティーヴンは、ふとしたきっかけで、無神経にも、リンカンの幼い聖ヒュー⁵⁶⁾のことを歌ったバラッド(U 17. 802-28)を歌ってしまう。それにたいしては、温厚かつ寛大にひとに接することを常とするブルームですら愕然とし、動揺せざるを得ない。それでもなお、スティーヴンを歓待しようとするブルームの心遣いそのものは、なんら妨げられることがないのだ。

ブルームが、他の人びとよりも心細やかに気に懸けている対象としては、ほかにいわゆるマッキントッシュの男、すなわち、第六挿話「ハーデース」のグラスネヴィン墓地の場面で、パトリック(パディ)・ディグナムの葬儀の会葬者と関係者以外に、ひとりだけその場に来ていた、身元のわからない、誰も名前を知らない、茶色のマッキントッシュ(防水外套)を着た男(U 6. 805, 825, 894-95)⁵⁷⁾が挙げられよう。この件にかんしては、通常、マッキントッシュの男とは誰かということのみが問題となるが、おそらくはそのことよりも、そもそもなぜブルームはその男のことを気に留めなければならないのかという点のほうに比重があるのではなからうか。ブルームは気に留めるが、他の者は誰ひとり気に留めることがない。そのような決定的な差異こそが重要なのだ。「彼は死か、圧迫か、迫害か、生命か、それとも愛か」(Nabokov 1980:

318) ——われわれとしては、さらに「運命か」というひとことを加えてみてもよさそうだ。

この問題について、ナボコフが呈示する答はきわめて単刀直入なものである。「彼が何者であるか、私たちは知っているのだろうか。知っていると思う。その手掛かりは、第二部第四章〔正しくは第二部第六章、すなわち第九挿話「スキュレーとカリュブデイス」〕、図書館の場面で生じる。スティーヴンはシェイクスピアを論じて、彼の、シェイクスピアの作品のなかにはシェイクスピア自身が現前していると断言する。シェイクスピアは、と彼は張り詰めた口調でいう。『彼は自分自身の名前、ウィリアムという美しい名前を戯曲のなかに隠したのです。時には端役として、時には道化役者として、ちょうど昔のイタリアの画家が画布の暗い片隅に自分の顔をそっと描きこんだように……。』[U9: 921-23] これこそ、まさしくジョイスが行なったことだ——画布の暗い片隅に自分の顔を描きこむということが。この書物の夢のなかを通り抜けてゆく、茶色のマッキントッシュを着た男とは、作者自身にほかならない。ブルームはみずからの創造主を垣間見ているのだ！」(Nabokov 1980: 319-20)

茶色のマッキントッシュの男が、作者自身かどうかはともかく、作者ひとりのみを知るなんらかの意味を託された存在であるらしいことは、おそらく認められてよい。それとともに、その存在を意識する者がテキスト内においてはブルームひとりだけであること、ブルームの視点があれば、読者が(茶色のマッキントッシュの男の身元のような)謎を謎として、細部を細部として受けとめることすら叶わぬように、テキストが形成されていることを、読者はそもそもはじめに感知しなければならないはずである。

この例からも飲みこむことができるように、結果として見て、ブルームというただひとりの登場人物があまりにも多くを、テキスト内の大半のところを担わされることとなったのは否定できない。しかし同時に、それによって生み出されたのが、きわめて特異な登場人物であることもまた確かである。ナボコフが参照したケインの著書においても指摘されているように、スティーヴンの思考が、形而上学的思索というただひとつのレヴェルに依存しているのにたいして、ブルームの思考は、経験の全領域に及んでいる。ブルームは、「すべての文学とはいわぬまでも、虚構作品の歴史上、もっとも完璧に性格づけられた人物」なのである⁵⁹⁾。

註

- 1) Vladimir Nabokov, *Lectures on Literature*, ed. Fredson Bowers (New York: Harcourt Brace Jovanovich / Brucoli Clark, 1980). 引用箇所は括弧内のページ番号によって示すこととする。
- 2) Vladimir Nabokov, *Lectures on Russian Literature*, ed. Fredson Bowers (New York: Harcourt Brace Jovanovich / Brucoli Clark, 1981).
- 3) 「十九世紀および二十世紀の英語、ロシア語、フランス語、ドイツ語の長篇小説と短篇小説」(Nabokov 1980: vii) を扱う講義。

- 4) ただし、受講者たちの大多数が英語を母語としている点に配慮し、原著が英語以外の言語で執筆されている場合でも、教材とされたのは英語訳であったため、作品の言語的特質にかんする分析にはおのずと制約が生じざるを得なかった。
- 5) ならびに、『ロシア文学講義』のうちには含まれていないものの、年度によっては授業で取りあげられたことのあるアレクサードル・プーシキン。
- 6) Karlinsky 2001: 262-63. Cf. Boyd 1991: 166.
- 7) Karlinsky 2001: 265.
- 8) 鈴木聡「虚構と構造——ヴラジーミル・ナボコフの『マンスフィールド・パーク』論」（『東京外国語大学論集』第84号、2012年）。鈴木聡「霧と変化——ヴラジーミル・ナボコフの『荒涼館』論」（『東京外国語大学論集』第86号、2013年）。鈴木聡「移行と停滞——ヴラジーミル・ナボコフの『ボヴァリー夫人』論」（『東京外国語大学論集』第88号、2014年）。鈴木聡「変身と併存——ヴラジーミル・ナボコフの『ジークル博士とハイド氏の奇妙な事件』論」（『東京外国語大学論集』第90号、2015年）。鈴木聡「層と記憶——ヴラジーミル・ナボコフの『スワン家のほうへ』論」（『東京外国語大学論集』第92号、2016年）。鈴木聡「脚と殻——ヴラジーミル・ナボコフの『変身』論」（『東京外国語大学論集』第94号、2017年）。
- 9) ウィルソンとナボコフの読書の好みが一致することはさほど多かつたわけではない。ナボコフは、オースティンの真価を認めたのと同時期に、ウィルソンが推奨し、貸し与えてくれたジャン・ジュネの長篇小説『花のノートルダム』（1943年）を読み、部分的に楽しんだものの、高評価を完全に共有するまでには到らなかった（1950年四月二十八日付書簡）。Karlinsky 2001: 266. Cf. Karlinsky 2001: 21.
- 10) スティーヴンソンの作品を講義で取りあげたいというナボコフの意向にたいして、ウィルソンは、スティーヴンソンは「二級品」だと述べ、強い反対を表明した（1950年五月九日付書簡）。Karlinsky 2001: 271.
- 11) James Joyce, *Ulysses*, The Collected Text, edited by Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior and with a new preface by Richard Ellmann (London: The Bodly Head, 1986). 引用箇所は、慣例にしたがって括弧内の挿話番号と行番号で示すこととする。
- 12) ナボコフの書簡にたいする返信のなかでウィルソンは、「アイルランド人であるという理由でジョイスを除くならば」、「比類なく偉大な」ふたりのイングランド人作家とはディケンズとオースティンであると主張していた（四月二十七日付書簡）。Karlinsky 2001: 265.
- 13) 『ウィスコンシン比較文学研究』誌第八巻第二号（1967年春）に掲載され、のちに『強硬な意見』（1973年、Vladimir Nabokov, *Strong Opinions* [1973; New York: Vintage International, 1990]）に収録された。Nabokov 1990: 62-92.
- 14) Nabokov 1990: 71.
- 15) Edmund Wilson, *Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of 1870-1930* (New York: Charles Scribner's Sons, 1931). ジョイスの手法をフローベールの衣鉢を継ぐものとする指摘などのように、ナボコフが共鳴したであろう箇所が散見されるものの、彼はウィルソンの著書に直接言及することを避けている。
- 16) 原文通りの正確な引用とはなっていない。ナボコフは、“Joyce lost his religion, but kept his categories.”と記しているが、レヴィンの原文では、“He lost his faith, but he kept his categories.”である。レヴィンは、「ジョイスは神学を経由して美学に接近した」、「彼はもつとも中世的な意味におけるリアリスト [実在論者] であった」とも述べている。Levin 1960: 25.
- 17) Harry Levin, *James Joyce: A Critical Introduction* (New York: New Directions Publishing Corporation, 1941).
- 18) Richard Morgan Kain, *Fabulous Voyager: James Joyce's "Ulysses"* (Chicago: Chicago University Press, 1947). ケインの著書にかんしては、「レヴィンが強調した文体的、自然主義的な細部に焦点を絞り、それらを入念に探究している」と評価する向きもある。McKenna 2002: 228.
- 19) Patricia Ward Hutchins, *James Joyce's Dublin* (London: Gray Walls Press, 1950).

- 20) Cf. *Thom's Official Directory* 1904: 1482; Kain 1959: 122-23. 同じ住所には、一時期(1908年から1910年)、ジョイスの友人ジョン・フランシス・バーンが住んでいたことがある。エクルズ・ストリートは、ノース・サーキュラー・ロードのニブロック南方に位置し、東側にはドーセット・ストリートが通っている。その通りを渡った少し先、ハードウィック・プレイスに聳える聖ジョージ教会の時鐘が、『ユリシーズ』のいくつかの場面において描写されている。U 4. 531, 544-51; U 15. 1186, 4083-86; U 17. 1224-34.
- 21) ナボコフが学生に繰り返し与えたとされる「細部を愛撫せよ」という訓戒はとりわけよく知られている。Cf. Nabokov 1980: xxiii.
- 22) 当初アレグザンダー・トム(1801年生、1879年歿)の編著として出版されたものの改訂版。ジョイスが参考文献として用いた第六十一版(1904年版)は三巻からなり、第三巻にあたる部分一般在『ダブリン市住所氏名録』(その1886年版がブルーム家の蔵書に含まれている[U 17. 1362])と呼ばれている。同書の全巻がデジタル化されている。
<<http://www.riverrun.org.uk/joycetools.html>>
- 23) Cf. Kain 1959: 51. この事故で乗員・乗客1021名が焼死したり溺死したりした。
- 24) Cf. Kain 1959: 54. 正確に言えば、ジョイスとノーラが最初に出会ったのは1904年六月十日金曜日であり、六月十六日はふたりがはじめてデートした日である。
- 25) フランク・バジェンの先駆的著作(Frank Budgen, *James Joyce and the Making of "Ulysses"* [New York: Harrison Smith and Robert Haas, 1934])によって触発されたものと見ることが可能だろう。
- 26) 単行本化にあたりそれらの標題は取り除かれたが、研究書、論文等においては用いることが慣例となっている。ナボコフは、学生の答案中で各挿話の標題が言及されていた場合には評価を下げることにしていた。Cf. Nabokov 1990:55; De La Durantaye 2007; 115-16.
- 27) 1920年九月二十一日、ジョイスの作品のイタリア語翻訳者カルロ・リナーティに与えたもの(リナーティ計画表)と、1921年十一月、刊行されるまえの『ユリシーズ』にかんしてパリで講演を行なうことになった作家ヴァレリー・ラルポーのために作成したのち、伝記作者ハーバート・ゴーマンらに写しを送り、批評家・翻訳家スチュアート・ギルバートに著書のなかで発表することを許したもの(ゴーマン=ギルバート計画表)がある。
- 28) 実際は、計画表中の器官の項目に胃は含まれていない。
- 29) Stuart Gilbert, *James Joyce's "Ulysses": A Study* (London: Faber and Faber, 1930). 1937年頃、パリのポール・レオンのアパートマンでジョイスと会食したナボコフは、この本にたいするジョイス自身の否定的評価を直に聞かされた。Cf. Ellmann 1982: 616.
- 30) 『ヴォーグ』誌1969年クリスマス号に掲載され、のちに『強硬な意見』に収録された。Nabokov 1990: 153-76.
- 31) Nabokov 1990: 157.
- 32) Gilbert 1966: 145.
- 33) いうまでもなく、T・S・エリオットの古典的エッセイ「『ユリシーズ』、秩序、神話」(1923年)で論じられたことがらである。ジョイスがみずからの作品の標題とした『ユリシーズ』が三重の意味——ホメロスの作品、そのラテン語訳をはじめとする後世における受容、ジョイス自身の作品——を担っていることも心に留めておいてよいだろう。
- 34) 『変身』にかんする講義のなかでナボコフが次のように述べていることを想起するべきであろう。「…『変身』における三の強調には、象徴的な意味ではなく、むしろ表徴的ないしは紋章学的な意味にほかならないものがある。じっさい、それには専門的な意味合いがある。三位一体、三行連句、三連祭壇画とは、たとえば青年、壮年、老年、その他なんであれ、三部からなる、三重の主題を描いた三幅対の絵の場合と同じように、明白な藝術形式なのである。」(強調は原文による) Nabokov 1980: 282-83.
- 35) ナボコフの講義草稿の複写版(Vladimir Nabokov, *Lectures on Ulysses: A Facsimile of Manuscript, with a forward by A. Walton Litz* [Bloomfield Hills, Michigan: Brucolli-Clark Layman, 1980])から手掛かりないしは判断材料が得られるものと思われる。Cf. Moynahan 1995: 441; Lernout 2018: 107.

- 36) 講義の締め括りにあたる箇所ではナボコフは、第十八挿話の最後一ページ半ほどの引用（U 18. 1540-1609）を行なっている。Nabokov 1980: 368-70.
- 37) スワンのモデルとなったとされるシャルル・アースという人物がたまたまユダヤ人であったことから、この設定が必要となったものと考えられる。
- 38) 人物造型の方法の分析にさいして、ナボコフが、ブルースト的方法とジョイスの方法を対比させていることを想起しておいてもよいだろう。「登場人物に肉迫することにかんしてブルースト的方法とジョイスの方法のあいだには本質的な差異がある。ジョイスはひとりの完全で絶対的な登場人物、神のみが知り、ジョイスのみが知っている人物を取りあげたのちに、その人物を解体して断片化し、みずからの書物の時空全体にわたってそれらの断片を撒き散らす。」 Nabokov 1980: 217.
- 39) 『ユリシーズ』第九挿話「スキュレーとカリュプティス」（U9. 1209-11）と第十二挿話「キュクロプス」（U 12. 1667）でブルームは「彷徨えるユダヤ人」（「アハスエルス」という呼び名が用いられることもある）に喩えられている。
- 40) 第一挿話「テーレマコス」では、スティーヴンの友人バック・マリガンとオックスフォード大学で知り合ったイングランド人、ヘインズが、祖国が「ドイツのユダヤ人」（U1. 667）の手に落ちるのを見たわけではないという心情を吐露している。
- 41) 母エレン（旧姓ヒギンズ、彼女の父もまたハンガリーからの移民であった）はカトリックである。ルードルフは、妻の死後、1886年六月二十七日、みずからが所有する、クレア州エニススのクイーンズ・ホテルで服毒自殺している。U 6. 335-42, 359-65, 526-32; U 17. 619-32.
- 42) 父ルードルフは、もともと姓であるヴィラグ（Virag）がハンガリー語で花を意味することから、それを英語化してブルーム（Bloom）と改姓したのである。
- 43) 二者の対立や結びつきが、さまざまな形態で立ち現われることは、『ユリシーズ』というテキストが有する著しい特徴のひとつであるが、そのなかにあっても、ブルームとスティーヴンの擬似・親子的な絆は鍵となるものと考えられる。また、そこから父性（文明の根幹でありながら、虚構性から脱却し得ないもの）という問題に接近する手掛かりも得られるはずである。Cf. Schwarz 1987: 33-36.
- 44) これがナボコフによる解釈であるということ、念のために付け加えておくべきかもしれない。読者がそのような読みかたをするよう導くべく、テキストの機構が組み立てられていると説明づけるほうが正しいのではないと思われる。
- 45) Vladimir Nabokov, *The Annotated Lolita*, ed. Alfred Appel, Jr. (1970; rev.ed., New York: Vintage Books, 1991).
- 46) 『ユリシーズ』のなかでは、ブルームがスティーヴンの視覚的印象として得たものについて、「鋭敏な若い男性の見慣れた姿形のうちに未来の運命 [the predestination of a future] を見た」（U 17. 780）と記されている箇所が例となるように、“fate” という語以外に類語として “predestination” という語が用いられている。
- 47) 歌っているのは、スティーヴンの父サイモン・デダラスである。ナボコフは、このアリアが「いまはすべて失われ」という題であるかのように述べている（Nabokov 1980: 339）が、それはベルリーニの歌劇『夢遊病の女』（1831年）のアリアである。U 11. 22, 629.
- 48) 『マルタ』の台本はドイツ語であるが、このアリアについてはイタリア語訳詞が多く用いられる。ジョイスが引用したのは、チャールズ・ジェフリーズによる英語訳詞である。Gifford 1989: 292.
- 49) 講義用草稿ではこの点がよりいっそう強調されているとモイナハン指摘している。Moynahan 1995: 440.
- 50) ナボコフが用いている章区分にしたがうならば、「第一部第一章、第二部第一章、第三章」ということになる。以下、同様の異同にかんしては、そのつど註記すると煩雑になるため、省略することとする。
- 51) この挿話においては、音楽が主要な主題であり話題であるのみならず、冒頭の六十三行で呈示された個々のモチーフが、その後、それぞれ展開されるという手法が取られている。独立した各声部（個々の登場人物の言葉や歌）が調和を保つように配置されている点も注目される。
- 52) 「超自然的」と呼ぶほうがより適切かもしれない。

- 53) 夥しい例があり、第一挿話の早い時点で、ミサ冒頭で唱えられる、『詩篇』第四十三篇四行に由来する文句(“Introibo ad altare Dei.” [「我、天主の祭壇に上らん。」] [U 1. 5]) や、全篇をとおして繰り返されることとなる、スティーヴンの母の臨終に立ち会った、彼以外の人びとが唱えた祈りの一部(“Liliata rutilantium te confessorum turma circumdet: iubilantium te virginum chorus excipiat.” [「百合の如く輝ける証聖者の群れ、汝を囲まんことを。喜び歌う童貞の群れ、汝を迎えんことを。」] [U 1. 276-77, 736-38; 9. 222-23; 15. 4164-65; 17. 1230-31]) のようなラテン語の引用が現われる。
- 54) Cf. Kain 1959: 248. ケインはその著書の附録で、「リーオポウルド・ブルームの気質、人格、ならびに意見」にかんする詳細な一覧表をつくり、各項目を索引化している。そのなかに、「気質」という大項目の下位区分として「憐憫と共感」という小項目が含まれている。
- 55) ブルームは、父が「最後の望み」として、アトスのことをよろしく頼むといていたことを思い出す。このイメージは、第三挿話「プロテウス」のサンディマウント海岸の場面で、スティーヴンにじゃれつく犬のイメージ(U 3. 294-352) と対応していると見ることもできる。
- 56) 1 2 5 5 年、ユダヤ人によって殺害されたものと目されて、殉教者として祭られるようになった少年。Cf. Gifford 1989: 579.
- 57) この人物については、このあとのところで、たびたび言及されることになる。該当箇所は以下の通り。第十挿話(U 10. 1270)、第十一挿話(U 11. 1250)、第十二挿話(U 12. 1497-98)、第十三挿話(U 13. 1062)、第十四挿話(U 14. 1546)、第十五挿話(U 14. 1558-65)、第十六挿話(U 16. 1261, 1265)、第十七挿話(U 17. 2066)。
- 58) Kain 1958: 277, 243. ケインは、ブルームとスティーヴンそれぞれに結びつけられている「言葉を用いたモチーフ」の一覧表を作成した結果、ブルームと繋がりのあるモチーフのほうが数が多いだけでなく、より精緻に、より多彩に練りあげられていることを見いだした。「スティーヴンの精神のほうか、世間一般で受け容れられている意味において深遠ではあるかもしれないものの、だからといってより興味深いわけではない」というケインの見解は、ナボコフに多少影響を与えたかもしれない。

参考文献

- Benejam, Varerie, and John Bishop, eds. 2011. *Making Space in the Works of James Joyce*. New York and London: Routledge.
- Boyd, Brian. 1991. *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Budgen, Frank. 1960. *James Joyce and the Making of Ulysses*. With a Portrait of James Joyce and Four Drawings of *Ulysses* by the Author. Introduction by Hugh Kenner. 1934; Bloomington and London: Indiana University Press.
- De La Durantaye, Leland. 2007. *Style is Matter: The Moral Art of Vladimir Nabokov*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Diment, Galya. 1995. “Teaching.” In *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Vladimir E. Alexandrov. New York and London: Garland Publishing, Inc., 705-14.
- Ellmann, Richard. 1982. *James Joyce*. New and Revised Edition. 1959; New York, Toronto, London: Oxford University Press.
- . 1978. *Ulysses on the Liffey*. 1972; New York: Oxford University Press.
- Fargnoli, A. Nicholas, and Michael Patrick Gillespie. 2006. *Critical Companion to James Joyce: A Literary Reference to His Life and Work*. New York: Facts On File, Inc.
- Foster, John Burt, Jr. 1993. *Nabokov's Art of Memory and European Modernism*. Princeton: Princeton University Press.
- Frank, Joseph. 1995. “Lectures on Literature.” In *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Vladimir E. Alexandrov. New York and London: Garland Publishing, Inc., 234-58.
- Gifford, Don, and Robert J. Seidman. 1989. *Ulysses Annotated: Notes for James Joyce's Ulysses*. Berkeley, Los

- Angeles, London: University of California Press.
- Gilbert, Stuart. 1955. *James Joyce's Ulysses: A Study*. 1930: New York: Vintage Books.
- , ed. 1966. *Letters of James Joyce*. Vol. 1. 1957; New York: The Viking Press.
- Häggglund, Martin. 2012. *Dying for Time: Proust, Woolf, Nabokov*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Joyce, James. 1986. *Ulysses*. The Collected Text. Edited by Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior and with a New Preface by Richard Ellmann. London: The Bodly Head.
- .1992. *Ulysses*. Annotated Student's Edition. With Introduction and Notes by Declan Kibert. Harmondsworth: Penguin Books.
- Kain, Richard Morgan. 1959. *Fabulous Voyager: James Joyce's Ulysses*. 1947; New York: The Viking Press.
- Karlinsky, Simon, ed. 2001. *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-1971*. 1979; Revised and Expanded Edition, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
- Lernout, Gert. 2018. "Nabokov on Joyce and *Ulysses*." In *Vladimir Nabokov's Lectures on Literature: Portraits of the Artist as Reader and Teacher*. Ed. Ben Dhooge and Jürgen Pieters. Leiden, Boston: Brill Rodopi, 101-20.
- Levin, Harry. 1960. *James Joyce: A Critical Introduction*. 1941; New York: New Directions Publishing Corporation.
- McKenna, Bernard. 2002. *James Joyce's Ulysses: A Reference Guide*. Westport, Conn: Greenwood Press.
- Moynahan, Julian. 1995. "Nabokov and Joyce." In *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*. Ed. Vladimir E. Alexandrov. New York and London: Garland Publishing, Inc., 433-44.
- Nabokov, Dmitri, and Matthew J. Bruccoli, eds. 1989. *Vladimir Nabokov: Selected Letters 1940-1977*. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- Nabokov, Vladimir. 1991. *The Annotated Lolita*. Ed. Alfred Appel, Jr. 1970; rev.ed., New York: Vintage Books.
- . 1980. *Lectures on Literature*. Ed. Fredson Bowers. New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark.
- . 1981. *Lectures on Russian Literature*. Ed. Fredson Bowers. New York: Harcourt Brace Jovanovich / Bruccoli Clark.
- . 1990. *Strong Opinions*. 1973; New York: Vintage International.
- Pierce, David. 2007. *Reading Joyce*. New York and London: Routledge.
- Schwarz, Daniel R. 1987. *Reading Joyce's Ulysses*. Basingstoke and London: Macmillan Press Limited.
- Thom's Official Directory of the United Kingdom of Great Britain and Ireland for the Year 1904*. Sixty-First Annual Publication. Dublin: Alex. Thom and Company Limited.
- Wilson, Edmund. 2004. *Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of 1870-1930*. Introduction by Mary Gordon. 1931; New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Wood, Michael. 1994. *The Magician's Doubts: Nabokov and the Risks of Fiction*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

本研究は科研費（17K02539）の助成を受けたものである。